

ふだん着のままの色なり吾亦紅 ツル子  
鑑賞・吾亦紅の色を問われて、普段着の色  
だと答えた。この把握が良い。  
非凡な句になっている。

栗爆せて原発二機の炉燃ゆる 明美  
添削・栗爆せて原発二基の再稼動

一灯のゆらぎの底の鉦叩 才美

遙か迄入日に染まる柿の里 弘子  
鑑賞・普通は、柿が熟れて地を赤く染める、  
みたいな句立てをするが、  
この句は常套表現を巧みに回避している。

鑑賞・伝統的な俳句の作り方であるが、ゆ  
らぎの底と言う表現が良い。別  
の虫では駄目であろう。

コンビニの中の薬局夜業の灯 明美

始まりまりし雑木紅葉医者通り ヤ

添削・コンビニの中の薬局秋ともし

エ子

にぎやかに送らるる友照紅葉 友子

添削・始まりし雑木紅葉や医者通り

添削・にぎやかな葬送なりし照紅葉

流星や先に決めおく願ひ事 友子

笑ひ健康寿命天高し ツル子

添削・流星や胸に秘めたる願ひ事

添削・大笑の健康寿命天高し

菊日和話しかけるゴリラの眼 才美

陸奥平野青田千枚丈揃う 幸

鑑賞・ゴリラが話しかけてくるという見立  
ては、菊日和だからこそ受け入れ  
られる。檻の外の人間に対するゴリラの感  
情は、その人間に向けられてい  
る眼によく表れている。

添削・稔り田の丈の揃ひし陸奥平野

晩秋の空バルーンの花やげり 明美

色あせし寂しさつのる曼珠沙華 邦子

小さき子と加賀のお干菓子秋うらら 才美  
添削・手のひらへ加賀のお干菓子秋うらら

添削・色あせの募る寂しさ曼珠沙華

満月や夫の靴音帰り来る 友子

電子辞書鳴る音だけの夜長かな 弘子

添削・帰り来る靴音一つ月今宵

添削・電子辞書鳴らすばかりの夜長かな

この秋はジャズミサ歌う気分なり 直子

栗爆せて次の世代へ負の火種 明美

添削・口の端のジャズミサひとつ秋深し

添削・蓮の実の飛んで次代へ負の火種

手を合やすだけの寺でら山紅葉 弘子

登り来て息ととのへし石路の花 ツル子

添削・遠くより合掌の寺山紅葉

朝の庭落ちた熟柿鳥の声

邦子

東空に流れ星見て幸祈る

直子

添削・朝の庭落ちし熟柿へ鳥の声

添削・幸祈る東の空の流れ星

木犀や命短かき香りなり

直子

山毛櫨紅葉木漏れ日の中弾足

ヤエ

添削・木犀のいのち短き香へ浸る

子

添削・木漏れ日に足弾ませて山毛櫨紅葉

だんまりも時には眩し冬桜

才美

赤とんぼ群れて寄り来る野球場

幸

ましきよりも、かえって

添削・球場の野手の目の先赤とんぼ

眩しさを感じている作者。冬桜の季語を配

合したのが良い。

(不在投句 古野明美)

身に入むや日々小さくなる母のあり 友子

添削・見に入むや日々に小さき母の影

団栗を足裏つばに当てにけり

直子

添削・足裏のつばへ団栗当てにけり

行き摺りに銀杏拾つてみたけれど 弘子

添削・行き摺りに拾ふ銀杏二つ三つ

石段の尽きし大寺うすもみじ

弘子

添削・大寺の石段尽きし薄紅葉

赤黄の落葉見ながら老い感ず

直子

添削・老いの身の踏みし落葉や赤黄色

胡蝶蘭針金纏う晴れ姿

眞壽

添削・針金の揺れて耀ひ胡蝶蘭

心地よき布団のぬくもり朝寒し

邦子

添削・心地よき蒲団たたみし朝餉かな

屋根の青紅葉の赤が空覆う

眞壽

添削・